

氏名（本籍）	オウ シジュン WANG ZIJUN（中国）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第147号
学位授与年月日	2022年3月23日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第36条第2項及び広島市立大学学位規程第3条第2項の規定による
学位論文題目	金箔地テンペラ画におけるポリメント金箔処方の箔表現効果について—チェンニーノ・チェンニーニによる古法の復元的考察を通して現代における制作に有効な処方へ—
論文審査委員	主査 教授 森永 昌司 委員 准教授 石黒 賢一郎 委員 准教授 石松 紀子 委員 准教授 浦上 雅司（福岡大学 教授）

論文内容の要旨

本研究は、油絵分野における金箔地テンペラ画のポリメント金箔処方の研究を通して、絵画領域の箔表現効果を考察するものである。チェンニーノ・チェンニーニ著『Il Libro dell'Arte』（絵画術の書）によるポリメント金箔処方の復原を通して、中世の技術に熟練しながら、油絵分野において有効な処方を考察する。またポリメント金箔処方が現代の絵画様式に与える新たな表現とは何か、その表現が進化する可能性を考察し、定格的なイメージから多様に模索することで、現代に応用できる絵画表現に繋げていく研究である。

2018～2019年の間に、筆者はイタリア、フランスなどの美術館や教会にて現地調査を行った。現地には、チマブーエやジョットらの巨匠だけではなく、無名の修道僧や芸術家の金箔地テンペラ画の作品が数多く残されていた。ルネサンスに関する美術史資料や画集の中に掲載されていない、優れた作品が多く存在しているのは驚きであった。現在でも教会や美術館の中に数え切れないほど飾られている金箔地テンペラ画。その金箔技術は何世紀にも渡って人気があった。しかし、この技法は制作過程で非常に手間がかかる上に多様性に欠けており、現代の制作には応用しにくいいため、取り入れることを断念するしかなかった。このような理由から、このポリメント金箔処方を現代の制作に効率よく使うことができれば、様々な表現の可能性が広がると思い、博士後期課程の研究テーマにすることを考えた。また、筆者は本論文を執筆する前に、すでに自主制作で沢山の実技考察を行っていた。その時点で確実に改良できる可能性があったと判断し、本研究に着手したのである。

第1章では、金箔地テンペラ画とポリメント金箔処方の関係性や総金箔処方、そしてチェンニーニ著『Il Libro dell'Arte』によるポリメント金箔処方について論述した。この章はポリメント金箔処方に関する基礎研究であり、読者に処方の由来と特徴、『Il Libro dell'Arte』の内容について分かりやすく解説した。

第2章と第3章の『Il Libro dell'Arte』によるポリメント金箔処方の復元的考察では、著者であるチェンニーニがいた中世ヨーロッパの処方を当時のままに再現した。この復元的考察は、

集中講義で広島市立大学にいらっしやった「黄金背景（金箔地）テンペラ画」の古典技法研究者の赤木範陸先生のアドバイスがあった。赤木先生によれば、チェンニーニの時代の処方そのまま再現する考察は、日本の研究者はまだ着手していないと見られており、きっと面白い研究になるだろうと仰ってくださった。しかし、この復元的考察に関する日本の文献は少なく、海外の文献を調査せねばならなかったことと、実技に関する資料がほとんどなかったため、かなり苦勞した。この考察は、論述篇と実践篇の二つに分け、主に『Il Libro dell'Arte』中の内容を考察しながら実践の画像を加えて、より読者が理解しやすくなるよう工夫した。この復元的考察は本論文の極めて重要な部分であり、次の改良考察に繋がっていく。

第4章の現代の制作に有効な処方・技術の考察では、前章での考察の元となった構造を利用し、さらに既存の文献の考察を通してポリメント処方の改良を行なった。この改良は、効率の悪い下地作りと多様性に欠ける箔押しとの二つのポイントに分かれている。主指導教員の森永昌司先生からアドバイスをいただき、幾つかのロシア式の金箔地テンペラ画を実践し、石膏地作りの改良を行った。筆者が考案した石膏塊を用いることによって、下地の研磨の作業を引き算的な構造から足し算的な構造に変えることができた。これは、イタリア式の金箔地テンペラ画とロシア式の窪みのある聖龕(せいがん)の金箔地テンペラ画の両方に応用することができた。さらにこの改良は、古典的な石膏地を使用する際にも有効活用できるであろう。

また、金箔層の改良は最も時間を費やした考察であった。一つの箔表現効果を得るためには、その度に石膏地のテストピースを作り箔押しをしなければならない。第4章の中で記述しているように、本研究では正確な配合よりも、ポリメント金箔処方の構造を読者に伝えたいと考えている。この処方は、石膏層、粘土層、箔下の水引き液、金箔の押し方と磨き上げ方、これらが全て関係し互いに影響しており、高度な技量も必要とされている。ゆえに、文字だけの論述では限界があると感じた。

第4章の最後にポリメント改良処方による箔の制作例と絵画制作への応用例を載せたが、まだまだ沢山の箔表現効果が期待できる。光沢を出すことによって鏡面のような強い反射が得られる箔表現だが、これは様々な箔にも応用できる。また、絵画制作の応用として紹介している半艶の箔表現のように、艶出しから艶消しまでの表現も可能であり、多重性により幾つもの種類の箔を組み合わせることによって、絵画層がなくとも美しい作品として成立できるであろう。

筆者は、本論文・研究を通して、読者に油絵分野のポリメント金箔処方の魅力を伝えたいのである。今後、金箔地テンペラ画を制作・研究する人々、現在の制作に金箔や金属箔を使おうとする人々に、本論文が少しでも役立つことがあれば、幸いである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、芸術系の創作者によって、チェンニーノ・チェンニーニによる金箔地テンペラ画におけるポリメント金箔処方の復元的な考察と実践をとおして、現代の制作に有効な処方と箔表現効果について探求された研究である。

西洋の箔置き処方のひとつであるウォーター・ギルディングは現在まで、一部の修復家たちによって伝搬されてきたのだが、本研究では、チェンニーノ・チェンニーニにより遺された『芸術の書』を検証的に読み解く事で、現在に応用可能な技法として使えるように

しようという、実作者の視点を通して記述された、広く周知されるべき類稀な（たぐいまれな）研究となっている。

王子駿は中国出身であり、日本に伝わった古典技法を読み解く事で、ヨーロッパの古典技法の理解の有り様を、東洋人として追体験する事を通して、具体的な素材の名称や物理的な性質、美術用語などについて、現在の私たちにも理解できるように翻訳し伝えようとしており、またそれを、使える技法として実証し、方法論として提示されたところに、本研究の本質的な意義があると言える。

絵画史の文脈において、絵画芸術の可能性の広がりにも資する一考察として、本審査委員会において、論文ならびに作品が合格のレベルに達するものとして評価した。